

3

命いのちを感じかんじて

(1) 命あるものを大切に

(2) 自然しぜんや動植物どうしよくぶつを大切に

(3) 美しいうつくものを感じて

それは、
思い切りがんばること。
命をかがやかせること。



一生けん命 生きる！

● 「生きているってすばらしいな」と感じるのは、どのようなときでしょうか。

4年	3年

(1) 命あるものを大切に

生きているってどのようなことでしょうか

笑ったり泣いたり
することかな。

病気やけがをしても、
くじけない力を
もっていることかな。



おいしく
ご飯を食べられる
ことかな。

思い切り
力を出せる
ことかな。



食事をいただくことは命をいただくこと。
 たくさんの方の命にささえられてわたしたちは生きています。

4年	3年

● 命の大切さを感じたできごと
 を書いてみましょう。



わたしたちは、多くの人にささえられて生きています。
 生きているからこそわたしたちも、多くの人をささえることができます。

助け合って生きている 一生けん命生きている

命あるかぎり生きる

命

宮越 由貴奈（小学四年）

命はとても大切だ
人間が生きるための電池みたいだ
でも電池はいつか切れる
命もいつかはなくなる
電池はすぐにとりかえられるけど
命はそう簡単にはとりかえられない
何年も何年も
月日がたつてやっつと
神様から与えられるものだ
命がないと人間は生きられない
でも

「命なんかいらない。」
と言って
命をむだにする人もいる
まだたくさん命がつかえるのに
そんな人を見ると悲しくなる
命は休むことなく働いているのに
だから 私は命が疲れたと言うまで
せいっぱい生きよう

●この詩を読んで、「命」について考えたことを書いてみましょう。

これは宮越由貴奈さんが、院内学級の授業で感じたことを書いた詩です。
由貴奈さんは、平成十（一九九八）年六月二十八日、五年半におよぶ病氣とのたたかいの末、この世を去りました。
十一さい——。由貴奈さんの命の電池はしずかに切れました。

*院内学級 入院中の子どもが、教育を受けることができるよう病院内につくられた教育しせつ。



周りを明るくしてくれる由貴奈さん
赤ちゃんのおしめも取りかえてくれる由貴奈さん
泣いている友達をなぐさめてくれる由貴奈さん
自分の悲しみはそっと一人で泣いてはらしていた由貴奈さん
自分の食が細くなってしまったとき、友達のはげましを受けて、すごく努力して逆に太ってしまった由貴奈さん
由貴奈さんが再入院してくると、みんなが「自分たちの部屋に来て」と言った。

院内学級担当の先生が、由貴奈さんのことを書いたものです。



ヒキガエルとロバ

雨上がりの畑道。学校帰りのアドルフとピエールたちの前に、ヒキガエルが一ぴき、とび出してきた。

「うわっ。なんだ！」

「気持ち悪い！」

「ヒキガエルだぞ！」

「石をぶつけてやれ！」

子どもたちは口々にそうさげびながら、ヒキガエルを目がけて、小石を投げつけ始めた。

「当たった、当たった。」

「もっと石を持ってこいよ。」

アドルフに言われて、ピエールたちは、道ばたから石を集めてきた。

ヒキガエルは、子どもたちに追われながら、どろんこ道にある車のわだちへ転がりこんだ。



ちょうどその時、年をとったロバが、荷車を引いてやってきた。荷車だけでなく、背負っている大きなかごにも、野菜がいっぱいに積まれていた。荷車に乗った農夫から、たえずピシリピシりとむちが打たれていた。きつと一日のつらい仕事を終えて、自分の馬屋に帰っていく長い道のりの途中なのだろう。一步一步ふみしめるように、どろんこ道を進んできた。

「アドルフ、ヒキガエルのやつ荷車にひかれるぞ。」

「そっちを見ている方がおもしろそうだ。」

アドルフたちは、見守った。

ガタン、ゴトン、ガタン、ゴトン。くぼみにロバが近づいてくるが、坂道にあるわだちのあとがでこぼこで、なかなか前に進まない。

農夫は、ぐいぐいとたづなを引っ張り、むちを打ち続ける。

「ハアハア……。」



ロバの息があらくなる。一步一步近づいてきたロバはそのときふと、自分の足元できずを負って、じっとしているヒキガエルに気が付いた。

くぼみの中のヒキガエルは、もう動く力もないようだった。

ロバは、目をしてしている小さな生き物に鼻を近づけ、友達を見るようなやさしい目でじっと見続けていた。

農夫は、急に前に進まなくなったロバにはらを立て、何度もむちを打っている。

「ヒヒーン！」

とつ然ロバはいなくなると、グリーンと足をふんばった。自分に残った全ての力をふりしぼるかのようになり、歯を食いしばって、足に力を入れたのだ。背負ったかごが横にふられた。重い野菜がたくさん積んである荷車も少し動いた。ロバの顔は、さらに苦しそうになった。

そしてついに、車輪はゆっくりと動きだし、新しい



わだちをつけていったのである。荷車はヒキガエルのいるくぼみの横を、ガタン、ゴトンと大きな音を立てながら、通りすぎたのだった。

ヒキガエルは、助かった。

それを見ていたアドルフの手から、石が足元に静かにすべり落ちていった。ピエールたちも何も言わずに立っている。

やがて、荷車の音もロバのいななきも遠くになっていった。子どもたちは、くぼみの中で小さく息をしているヒキガエルと、遠く去っていくロバのすがたを、いつまでもいつまでも、ながめていた。

たった一つの命 つながる命

「生きているって…」

葉 祥明

空を見上げると

白い雲が浮んでいる

お日さまが輝いている

この世は素晴らしい！

生きているって不思議！

泣いても、笑っても

歌っても、倒れても

何が起こると、起るまいと

全て、うれしいこと

ネコがいる、犬がいる

小鳥がいる、虫がいる

大好きな家族がいて

仲の良い友達がいる

皆がいるからうれしい

それもこれも

僕がこうして生きているから

生きているって、すごい！

(2) 自然や動植物を大切に

動物や植物の生命の力

きくづくぐこ

わたしたちの学校では、一人一はちさいばいで、一輪ぎくを育てています。きくづくぐりはむずかしいので、学校の近くのきくづくぐり名人の山田さんに教えてもらいながら、大事に育てました。

秋が近付いて、きくはつぼみを付けました。

ある日の夜に、強い風がふきました。わたしは、

きくは大じょうぶかなと心配になりました。

次の朝、学校に行くと、わたしのきくのくきが折れていました。

(もう花は、さかないのかな……。)

わたしは、折れた所をじっと見つめました。

学校から帰って山田さんの所に行くと、山田さんは、学校までいっしょに来てくれました。

「ささえをそえて水をたくさんあげてみよう。何とか花がさくかもしれないよ。」

それから、わたしは水をあげてきくの様子を毎日、見に行きました。

一週間後のことです。きくは黄色い花びらを広げていました。

「やった。さいた。元気になった。」

わたしは、花びらをそっとなでてみました。



動物や植物の生命の力を感じて

動物や植物には、力強く成長し生きようとする力があります。

● 動物や植物の生命の力におどろいたことはありませんか。そのことを書いてみましょう。

3年

4年



歩道のアスファルトのすき間から生えてきた大根。「ど根性大根」とよばれました。
(兵庫県相生市)

動物や植物の不思議な力

わたり鳥のたい列

V字になると後ろを飛ぶ鳥が上向きの気流に乗れるので、少しの力で飛ぶことができま
す。先頭の鳥は、体力を使うので、時々後ろの鳥と交代するそうです。



アブラゼミの羽化

アブラゼミは、土の中でおよそ六年間をすごし、地上に出てからは、一生けん命鳴き続けて二、三週間ほどで命を終えます。



サケの稚魚

サケの稚魚は、川を下って海に出て成長し、二、六年ほどで自分が生まれた川にもどってきます。



いしわりぎくら

大きな石にかみなりが落ちてできたわれ目に、サクラの種が落ちて成長したと言われています。



(岩手県盛岡市)

自然や動物、植物との関わり

●自然や動物、植物とのこれまでの関わりをふり返って書いてみましょう。
かったり、育てたりしたこと

大切にしたこと

不思議だな、すばらしいなと思ったこと

人物のコラム

植物と共に生きた人

牧野 富太郎

牧野富太郎は、子どものころから植物が大好きで、近くの野山へ行っては、植物を観察していました。自分がこれまで見たこともない植物を見付けると、心がわくわくして、絵にかいたり、名前を調べたり、植物のつくりを観察するなどして、その不思議をとき明かしていくことに夢中でした。
二十二さいになると、富太郎は東京に行き、大学の研究室で植物学を学んだり、自分で全国を歩いて植物の研究を行ったりしました。
富太郎は、たくさんさんの植物を観察し、とても細かく植物の様子をかきとめて、植物図かんなどを記しました。

富太郎が記した「牧野日本植物図鑑」は、当時まだあまりくわしく知られていなかった植物のことを世の中の人に知らせるものとなりました。

また、「ムジナモ」など、これまで知られていなかった植物を発見し、一五〇〇種以上の植物に名前を付けました。

植物を愛し、植物と共に生きた富太郎は、今では「日本の植物分類学の父」とよばれています。



牧野 富太郎

(一八六二〜一九五七)
高知県出身の植物学者



牧野富太郎がかいた植物のスケッチ

4年	3年

● 人間の力をこえた自然の風景などに感動したことがありますか。そのときのことを書きとめておきましょう。



(3) 美しいものを感じて

美しい自然は、
わたしたちに
感動をあたえてくれます。
そして、
そこに宿る神秘的な力に
おどろかされることもあります。

三代杉

鹿児島県の屋久島には、じゅれい二千年代から七千二百年ともすい定される縄文杉の他、大王杉や夫婦杉、三代杉などと名前が付けられた大きな屋久杉があります。

三代杉は、三代にわたって命をつないできためずらしい杉です。
一代目の杉は、今から約三千五百年前に生え、二千年ほど生きてたおれました。その後、たおれた木の上に種が落ちて、芽を出して二代目となりました。
二代目は、一千年ぐらい生きて、切られてしまいました。
ところが、その切りかぶから三代目の杉が成長し、命をつないで、今、「三代杉」として生きています。

花さき山

(あらすじ)

斎藤隆介・文
滝平二郎・絵



たった十さいのおなごわらしのあやは、山でまよってしまいます。その山で出会った山んばに、いちめん大きく美しい花のひみつを教えてくださいます。



ふもとの村の人間が、やさしいことを一つすると、一つさく花。そこには昨日、あやが妹のそよのために泣く泣くお祭りの晴れ着をあきらめ、「おらはいらねえから、そよさかってやれ。」と言ったときにさいた美しい花がありました。



わたしたちの心が動くのは、感じる心があるから

さいている花を見ると思う。この花をさかせているものは、一体なんなんだろうーと。青空にそびえる山を見ると思う。山を大地からもり上げた力、今も中から張って、空にそびえさせているみなぎる力は一体なんなんだろうーと。

この世のものとも思えない花の中の花、山の中の山、その山がその花をさかせている所—それが花さき山です。われわれは一人ではなくてみんなの中の一人です。みんなの中でこそ、みんなとのつながりを考えてこそ、自分が自分なのです。そしてさらに、自分のためだけになく、みんなのために生きようとする人々が大勢出てきました。だれもがもっているそういう心の花の芽を、山を生み出すまでの力にもり上げられたら、自分は、みんなは、どんなにかすばらしくなることでしょう。

斎藤隆介「『花さき山』に添えて」より

●あなたは、「花さき山」のあらすじを
読んでどのようなことを感じましたか。

Empty box for reader's response.

◆図書室には、人の心の美しさや自然の
すばらしさなどを書いた感動する本が
あります。

こうした本を読んで、感想を話し合っ
てみましょう。

昔、富士山の見える東海道の道を、てくてくと歩いていく旅人がいました。この人は、北斎という絵かきでした。

北斎は、江戸を出発してから、遠くの山や森の向こうに、ちらちらと富士山が見えだすと、思わず足を止めました。そして、うっとりとながめ、つぶやきました。

「ここで見る富士山は、さっき見たのとは少しちがっている。」

江戸をたつてから二、三日……。なんと様々に見えるのでしよう。富士山のすがたは同じでも、やさしく見えるときや、にっこりほえんでいるとき、つんとすましているようなときもあります。朝の富士山、夕暮れの富士山……。北斎は、むねをわくわくさせました。道ばたに立って、夢中になって富士山を写しとりました。

半年ほど旅を続けて、北斎は江戸へ帰ってきました。北斎は浮世絵をかく人でした。浮世絵というのは、昔の版画です。北斎のかいた絵は大変な人気でした。人々は長い旅をした北斎が、どんな絵をかくのか待ちました。しかし、一つもかこうとはしません。

四、五年たつと、北斎はふたたび江戸から出ていきました。そして、前と同じように東海道を旅

していきました。箱根の山をこえると、北斎の目はかがやきだしました。すみわたった空に、くつきりと秋の富士山がそびえ立っていました。北斎の帳面は、富士山でいっぱいになりました。かききれないことはしっかりとむねの中にたたきこみました。そして、北斎は（ああ、この山をどんなふうにかき表したらよいだろう……）と、考え続けました。

一年あまり旅を続け、北斎は江戸に帰ってきました。江戸の人々は、北斎の絵を待ちましたが、北斎はかきませんでした。そして、五、六年の月日がたちました。

ところがある日、何を思ったのか、北斎はにこにこしながら、仕事部屋へ入っていきました。そして、半月ばかり絵筆を紙に走らせていました。

「さあ、できたよ。やっとできたよ。」

そう言って、仕事部屋から出てきました。北斎は、富士山をかいたのです。すばらしい富士山の絵でした。北斎が最初に富士山を見たときから、二十年近くもたっていました。その間、北斎は、富士山と自分がびったりと一つになるのを、ずっと待ち続けていたのです。



ふがくさんじゅうろっけい かながわおきなみうら
(富嶽三十六景 神奈川沖浪裏)



かつしかほくさい
葛飾北斎

それから後も、北斎は様々な富士山をかきました。一年に四、五まいずつ、十年ほどかき続けました。どれもこれも、あっとおどろくおもしろい、美しい富士山ばかりでした。遠くからや、近くから見た富士山、夜明けの真っ赤な富士山、大波がわき立っている間から、遠くにながめた富士山もありました。北斎の絵は四十六まいにもなりました。北斎ほど、様々な富士山をかいた人は他にありません。

「わたしは、一〇〇までも、一二〇までも生きるんだ。わたしが、どんなに富士山が好きか、みんなに見せてやるぞ。」

北斎はかき続けました。

こうして北斎は、「富士山の北斎」となりました。そして、北斎の浮世絵は、日本ばかりでなく海外でも知られるようになりました。



（富士三十六景 凱風快晴）

文化のちがいや時代をこえて、今でも北斎の作品は、世界中で愛されています。

(*1) 江戸 今の東京

(*2) 箱根 江戸から富士山へ向かう途中、今の神奈川県にある地名

(*3) 帳面 物をかくために、紙をとじて作ったノート

富士山は、標高三七七六メートルある日本で一番高い山です。大昔から何度もふん火をくり返して、今の形になりました。ふん火をしていたときは、「美しい山」というよりも「おそろしい山」だったにちがいません。

一方で、こうした火山活動などによって、富士山には大きな岩のどうくつができ、すそ野に広い森林が生まれました。また、富士山の地下から水がわき出ていて、その水が川や湖となつて、様々な動物や植物にゆたかなめぐみをもたらしています。

富士山のもつ雄大さ、美しさは、人の力をこえたものとして人々にうやまわれています。そして、平成二十五（二〇一三）年六月、ユネスコの世界文化遺産に登録されました。